



ベーシックな治療から最先端技術まで 県内トップレベルの水準

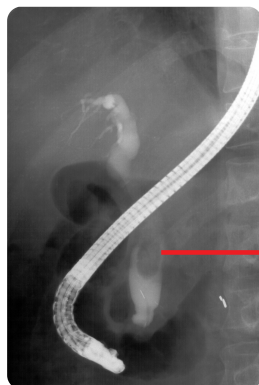
副院長／患者サポートセンター長
吉永 輝夫



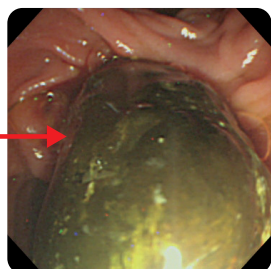
消化器内科代表部長
(兼)内視鏡センター長
田中 良樹

胆膵疾患の内視鏡治療

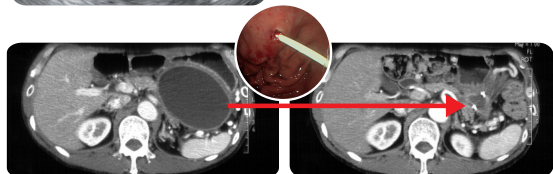
当科では胆膵疾患の内視鏡治療を積極的に行っています。2015年のERCP検査は626件でした。内訳はEST（乳頭括約筋切開術：総胆管結石を摘出します。）252件、EBD（胆管ドレナージ：癌などによる胆管狭窄によって閉塞した胆管の胆汁を十二指腸に流します。）283件でした。超音波内視鏡（EUS）、管腔内超音波検査（IDUS）、超音波内視鏡下穿刺吸引生検法（EUS-FNA）、胆道鏡なども併用し、胆膵疾患に対して病態に応じた診断方法を選択しています。また、難治性の膵仮性嚢胞に対しては、超音波内視鏡下に膵嚢胞ドレナージ術を施行しています。



EST：
総胆管結石（20×14mm）
もっと大きいものは破砕
して摘出します。



超音波内視鏡下膵嚢胞穿刺



ドレナージ行い、膵嚢胞縮少認めた

慢性肝炎から肝臓まで

慢性肝炎の多くはB型、C型肝炎ウイルスの感染によるものですが、C型慢性肝炎に対しては、ペグインターフェロン・リバビリン併用療法が導入されてから治療効果が格段に上昇しました。さらに現在は、経口剤療法が導入され、内服のみで副作用が少なく効果が高い治療（9割程度）となっています。また肝炎治療費助成制度が運用されており、経済的にも治療が受けやすくなっています。このため、インターフェロン治療が効かなかった方や副作用で断念した方、肝硬変の方、高齢の方にも積極的に治療を導入しています。

また、肝臓に対しては、局所療法（ラジオ波焼灼療法）を中心に肝動脈塞栓術、リザーバー動注化学療法などを駆使した集学的治療を行っています。ラジオ波焼灼療法は手術（肝切除術）に比べ身体の負担が少なく、かつ確実な焼灼域を得ることができる治療法です。当院は、ラジオ波治療専用室を完備し、CT画像と対比できるエコー装置を用いて、積極的にラジオ波治療を施行しています（2007年6月～2014年3月で540例、2014年4月～2016年3月で220例施行）。癌の部位により治療が困難な場合は、人工胸水・腹水併用にてラジオ波治療を施行しています。

この他にも、造影エコー検査や多発肝のう胞に対するエタノール注入療法など、あらゆる肝疾患に対し幅広く検査、治療を行っています。

肝疾患治療の進歩は目覚しく、個々の患者さんに最新かつ最良の医療を提供できるよう努めています。



当院のラジオ波治療専用室

●食道、胃、小腸、大腸の内視鏡治療

がん検診や人間ドックの普及により、無症状の早期胃癌が発見される機会が多くなっています。わが国ではまだしばらくはこの状態が続くと推測されます。

わが国の胃癌治療レベルは世界最高水準ですが、その代表の一つとしてわが国で開発された内視鏡的粘膜下層剥離術（Endoscopic Submucosal Dissection; ESD）という手技があります。2006年には保険収載され全国的に普及しています。

ESDを用いると日本胃癌学会の提唱する胃癌治療ガイドラインに記載されている従来の内視鏡治療の適応病変だけでなく、より大きな病変に対しても切除が可能になります。すなわち以前なら外科手術を行わなければ治癒切除出来なかった病変も内視鏡的に治癒切除できる可能性が広がりました（図参照）。胃の粘膜だけを大きく切除する方法ですので、約8日間程度で退院できますし、術後のQOLの低下もありません。昨年（2015年）までに404例の早期胃癌に対し

てESDを行っております。最近ではESDにて切除する範囲は拡大内視鏡とNBI（NarrowBand Imaging）を用いて正確に判断して、確実な切除を目指しています。

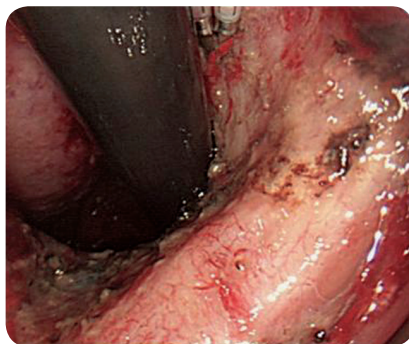
近年の画像技術や内視鏡の進歩は、今まで消化管の暗黒大陸と言われた小腸をも検査可能な臓器にしました。当院では2010年よりカプセル内視鏡（ギブン社製）とダブルバルーン小腸内視鏡（フジノン社製）を導入致しました。これにより食道から大腸まで全消化管の検査と内視鏡治療が可能になります。現在上部及び下部消化管内視鏡検査を行っても原因不明の消化管出血症例に対しては、カプセル内視鏡で出血源の検索を行っています。

また当院では大腸内視鏡検査は全て拡大機能をもつ内視鏡で行っており、病変の発見と同時に拡大観察とNBI観察ができるようになっていきます。これにより腫瘍と非腫瘍の判別が即座に出来るようになり、効率的な大腸粘膜切除術が可能となりました。

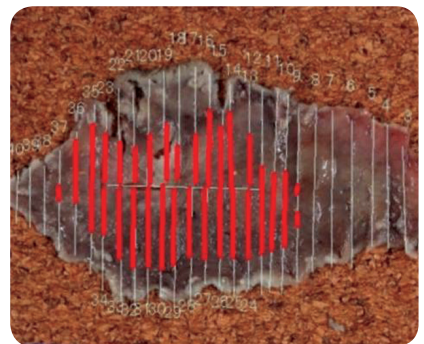
その他、ヘリコバクター感染診断における尿素呼気試験なども積極的に行っております。



胃体部小弯のIIc病変



ESD後の胃潰瘍



切除粘膜、赤の部分が癌